

中・四国アメリカ文学会会報 No. 46

THE CHU-SHIKOKU  
AMERICAN LITERATURE SOCIETY  
BULLETIN No. 46

中・四国アメリカ文学会  
June 2007

## 目 次

### 中・四国アメリカ文学会第36回大会（会場：高知大学）要旨

#### [研究発表]

1. Toni Morrison の *The Bluest Eye* に見られるブルースの手法とその役割  
..... 中村 日野実 2
2. *For Whom the Bell Tolls: Tension between Journalism and Fiction*  
..... Huang Jun 3
3. 「怪物」の正体は？  
—Stephen Crane の “The Monster” (1898) と電気恐怖の言説—  
..... 増崎 恒 4
4. エミリオ・ディキンソンの詩における法律のイメージ  
..... 濱田 佐保子 5

#### [特別講演]

- アメリカ文学史をめぐって ..... 亀井 俊介 6

#### [シンポジウム]

- メルヴィルとポストコロニアリズム ..... 司会 藤江 啓子 7
1. メルヴィルとコロニアルな視線 ..... 藤本 幸伸 8
  2. イスパノ・フォービアと奴隷制：  
「ベニト・セレノ」におけるポストコロニアリズム再考  
..... 辻 祥子 9
  3. メルヴィル最晩年の詩にみる楽園に触れる..... 大島 由紀子 10
  4. ポストコロニアリズムと『ビリー・バッド』 ..... 藤江 啓子 11

平成18年度活動報告.....	12
平成18年度会計報告.....	16
中・四国アメリカ文学会会則.....	18
会員名簿.....	20
編集後記..... 吉岡 志津世	32

## 中・四国アメリカ文学会第36回大会

### 研究発表・特別講演・シンポジウム発題要旨

#### 研究発表 1

#### Toni Morrison の *The Bluest Eye* に見られるブルースの手法とその役割

広島大学（院）中村 日野実

1993年、アメリカ黒人初のノーベル文学賞を受賞した黒人女性作家 Toni Morrison (1931-) は、黒人文化に根ざした創作を目指すことによって、作家としての確固とした自己のスタイルを築き上げた。その第一の特徴は、小説全体がリズム感にあふれ、音楽的であるという点である。実際、Morrison のノーベル賞受賞の理由の一つは、そのユニークな語りの手法にあると言われる。Morrison は黒人文学の最も主要な要素として、「作品には音があることが重要」だと考え、「耳に聞こえる文学を創る努力」が必要であると述べている。

Morrison の第一作目の小説 *The Bluest Eye* (1970) は、青い目を欲しがる黒人少女 Pecola の悲劇をとおして、Pecola に自己否定を強いた白人中心の美の価値観の残忍さと、奴隷解放後も姿を変えて根強く残るアメリカ社会における人種差別の苛酷さを描き出した作品である。表面的には「美醜」の問題を大きなテーマにした作品であるが、小説の形態や、登場人物の心理描写、さらにテーマにおいては、ブルース音楽を彷彿させる箇所が数多く見られる。このことから、Morrison は表現手段としてブルースの手法を巧みに用いて、この作品のテーマをより強く伝えることに成功していると思われる。

本発表では、この作品が、ブルースの手法を用いて書かれた小説であるという観点に立ち、語り手クローディアのブルースであると言えることを明らかにしていく。まず、小説の形態が、ブルースやジャズに欠かせない call-and-response や improvisation の手法を取り入れている様相を検討する。次に、比喩的表現に二重の意味や、二項対立的な言葉を含む傾向のあるブルースの歌詞の特質が駆使されている様を考察する。さらに、辛い時のユーモアと笑いと、多様性を受け入れるといったブルースの精神が、芸術的に生かされていることを検討する。そして、これらの手法が *The Bluest Eye* にもたらす全体的な役割と効果を検証し、作者が価値を置くブルースの精神の意義を究明したい。

*For Whom the Bell Tolls:*  
Tension between Journalism and Fiction  
(Abstract)

Huang Jun  
Doctoral Course  
Hiroshima University

Another considerable chance for Ernest Hemingway to write about war, in addition to World War I, was his engagement with the North American Newspaper Alliance (N.A.N.A.) to cover the Spanish Civil War as a correspondent in 1937 and 1938. His dispatches of the war suit the reader's need for news coverage with profound depth and background, with psychological insights into the social realities behind the news, and with journalistic interpretations and analyses.

Hemingway's experiences in the Spanish Civil War became the matrix of some short stories and *For Whom the Bell Tolls* (1940). His journalistic reports on the war and his observations about its scenes were the chief sources for the literary setting in that novel. Hemingway's purposes of composing *For Whom the Bell Tolls* seem dilemmatic. On one hand, he wanted to convey the truth of the Spanish conflict to the reader through literal pictures in the form of a "documentary" novel. On the other hand, he desired to introduce the historical elements in a work of imagination, to present his visions of emotions and attitudes toward the war rather than to record the actual images of the war.

By comparing his Spanish dispatches and *For Whom the Bell Tolls*, I insist that, though Hemingway's endeavor to objectively reveal social realities in *For Whom the Bell Tolls* is not necessarily successful owing to his slightly wrong knowledge about Spanish culture, the endeavor still should be as important as the inventive and creative enthusiasm he showed in the novel. The significance of the novel is not in how faithful the description is to the reality, but in how Hemingway judges the reality, and how he expresses his vision of the Spanish Civil War and of the social atrocity to the reader by means of fictitious creation and artistry.

「怪物」の正体は？

—Stephen Crane の “The Monster” (1898) と電気恐怖の言説—

追手門学院大学 増崎 恒

1897年に、Stephen Craneは、架空の町ホワイロンヴィルを舞台に、火事で顔に大火傷を負った黒人 Henry Johnson が「怪物」として再生する過程を描く中編“The Monster”を書き上げる。本作品はこれまで、Henry を含めた主要登場人物たちとホワイロンヴィルの人々を取り巻く「社会追放」と「偽善」という物語テーマの中に人間の普遍的な道德の問題を見る「テキスト中心批評」から、1896年の秋にニューヨークで娼婦を弁護した結果アメリカを追われる羽目になった作家自らの追放体験（Dora Clark 事件）と絡めて作品を解釈する「伝記的批評」、Henry の黒人性に着目した「人種主義批評」に至るまで広く論じられている。しかし、議論は一貫して、作中で「怪物」が「なぜ怪物として恐怖の対象となるのか？」を無視し、「怪物ありき」という前提で「誰が真の怪物か？」という単純なく怪物探しに終わっているように思われる。

Craneは1893年に、第一作 *Maggie: A Girl of the Streets* を発表している。同年シカゴでは、アメリカ大陸発見400周年を記念する万国博覧会が開催されている。万博では、電気館が人気を集め、夜になると7万個の白熱灯と5千個のアーケ電灯が会場全体を照らし出したという。アメリカの進歩を内外に誇示することを意図したこの万博において、「電気」がその中心に置かれ、アメリカ中はまさに電気という新しいエネルギーに沸き立っていたのである。この時代風潮を映すかのように、Craneは *Maggie* の中でも、「電灯」の描写を通して「電気」について言及する。Crane 諸作品の中でも、“The Monster”はとりわけ「電気」の描写・言及に富む。ところが、作品を「電気」と関連づけて読む試みはこれまでされてこなかった。近年の Crane 研究では、テキストの外にある社会文化状況と関連づけて Crane のテキストを論じる傾向にある。“The Monster”も、19世紀末アメリカ社会における「見世物文化」や「帝国主義」などの社会文化的コンテクストから読み直しが進んでいる。とすれば、“The Monster”における「電気」の描写・言及の多さは、当時の「電気をめぐる社会文化状況」と作品を結びつけて論じることが可能であることを示唆してはいないだろうか。

本発表では、この仮説に立って、作品発表当時のアメリカにおける電気をめぐる社会言説—電気による明るい未来の可能性に大衆が沸く一方で未知の存在である電気が大衆の不安を煽った「電気恐怖の言説」—という観点から、“The Monster”における「怪物の正体」を再定位し、併せてホワイロンヴィルの人々がその怪物を「怪物」として恐怖する「理由」を論じる。また、考察を通して、Crane 自身は同時代の電気に対してどのような態度を取っていたかも探りたい。

## 研究発表 4

エミリオ・ディキンソンの詩における法律のイメージ

岡山学院大学 濱田 佐保子

Emily Dickinson は、父の Edward、兄の Austin、父の友人である Otis Phillips Lord と弁護士に囲まれた生活であった。さらに、父の法律事務所で働いていた Benjamin Franklin Newton も見習い弁護士であった。主に彼らの影響を受けて、彼女の詩には、法律用語、法律に関連した言葉、法律の概念が見られる。この発表では、それらがどのように表れ、どのような役割、効果をもたらしているかを探ることを目的とする。

生き物を扱った詩の多くは、生き物に人間と同じように法を当てはめるが、生き物は法には無関心であることを歌っている。人間の法の外で生きている自由な生き物への羨望は、そのような立場にない語り手の苦しい状況を投影している。法を詩に取り込むことによりユーモアをかもし出している。その原因は、人間と生き物のすれ違い、生き物を人間のように尊厳を込めて描いていること、生き物が人間より優位に立ち、人間を出し抜いていることなどである。ユーモアの裏には、法への怒りが潜んでいる。

法に縛られたこの世、たとえば、制度としての結婚、人種差別などのへの批判的な態度は、理想の世界を思い描くことができる天上へと Dickinson を向かわせた。天上への接近に対する確信、安心を強めるために、スケールの大きな法律用語、つまり国家間のことに用いる法律用語を用いている。また、現世への失望は死ぬことに希望を見出している。そのような思いは彼女に死ぬことを権利という法に関連した言葉で表現させた。このような法律用語の使用において、しばしば宗教的な意味を重ねている。

Dickinson は、天上へ接近すればするほど、天からの距離、疎外感を感じるのであったが、神への不信は、Dickinson に大胆な法律のイメージの使い方を可能にした。神に真正面から、法という手段を見方にしてぶつかっている。また、神と人間の関係を、契約という法に関連した概念でとらえるのは、聖書にもよく見られるが、Dickinson は契約に、お金という俗的な概念を付け加えている。

「隷属することのない犯罪者」である Dickinson の魂は、自分の恵まれない立場を認識し、限界や既成概念を打ち破り、自己の場を獲得するために法律のイメージを用いた。そのため、法律用語の一般的な使い方から大きく脱皮した、彼女独特の、時には型破りな使い方が彼女の詩の世界を広げている。

## 特別講演

### アメリカ文学史をめぐって

岐阜女子大学教授 亀井 俊介

文学研究の中で、文学史の比重は大幅に低下してきている。しかもいまアメリカ文学史はさまざまな困難に直面している。アメリカやアメリカ人やらの定義があいまい模糊となり、あらゆる方面からキャノンの見直しが要求され、ではどのように見直すかということになると、そのための作品評価の基準が行方不明状態になっている。それでも、文学の史的展開の有様を関心の的とする研究者はいるわけで、この講演は一人のそういう(自称)研究者の関心のあり方をとりとめもなく語る内容になると思う。時間と能力が許せば、アメリカにおけるアメリカ文学史の著作を多少とも歴史的に展望し、これから日本人によってアメリカ文学史が書かれる際の参考に供したいという思いもあるが、たぶん時間も能力もそれを許さないでしょう。

## シンポジウム

### メルヴィルとポストコロニアリズム

司会 愛媛大学 藤江啓子

アフリカやインド、カリブ、南太平洋等旧植民地出身の作家たちの活躍によっていわゆるポストコロニアルの文学が近年注目されるようになってきた。それとともにポストコロニアリズムが、グローバリゼーションやかつてはイギリスの植民地ではあったが今や軍事的、経済的「帝国」と変貌したアメリカを考える一つのキーワードとなっている。こうした傾向にあって 19 世紀半ばに世界を航海したハーマン・メルヴィル (Herman Melville) はすでにグローバルな視座で世界と自国アメリカを見つめていたといえる。とりわけ 1841 年から 1844 年にかけての、ガラパゴス諸島、リマ、リオ・デ・ジャネイロ、ハワイ諸島、タヒチそしてマルケサス諸島方面への旅はヨーロッパの諸帝国によって植民地化された地域へメルヴィルの目を向けた。そして「食人種のあいだで暮らした人」としてデビュー作『タイピー』(Typee) の人気を得ることとなった。

メルヴィルはそれ以前の 1839 年には貨物船セント・ローレンス号に乗りイギリスへの旅を果たしている。1856 年再びイギリスをはじめとしてヨーロッパの旅へと出る。翌年 1857 年には聖地パレスチナに着く。作家の個人的な体験がそのまま作品に反映されるというわけではないが、それぞれ『レッドバーン』(Redburn) 『クラレル』(Clarel) といった作品の素材となっていることは否めない。『レッドバーン』は旧世界と新世界の複雑な関係をテーマにし、『クラレル』はサイドの「オリエンタリズム」に挑戦すると言ってよいほどにオリентへの傾倒を示した。帝国への旅、植民地への旅、東洋への旅を果たしたメルヴィルと彼の作品におけるポストコロニアル的ヴィジョンを検証することをこのシンポジウムの目的とする。彼のポストコロニアル的ヴィジョンは早くも 1951 年、トリニダード生まれの批評家、C.L.R. James の着目するところとなった。Geoffrey Sanborn も *The Sign of the Cannibal: Melville and the Making of a Postcolonial Reader* においてメルヴィルを「複雑に植民地化された世界の刷新」(xiii) へ向かう作家であるとする。彼はまたアメリカ国内にあっても移住者によって植民地化された先住民の理解者でもあった。各方面からメルヴィルとポストコロニアリズムを考察してみたい。

『白鯨』(*Moby-Dick*) 第44章海図に、エイハブ(Ahab) がしわくちやになった海図やこれまでに白鯨が出現した季節と場所を書き記した航海記を参照しながら、白鯨の現れそうな海域を突き止めようとしている場面が描かれている。ここで注目したいのは、エイハブが取り出した海図や航海記の存在についてである。15世紀末から本格化する大航海時代を牽引した国家がスペインとポルトガルであることは周知の事実であろう。この両国が1494年にローマ教皇裁可の下で地球を二分して以来、太平洋はスペイン・ポルトガル・オランダ・イギリス・フランスが入れ替わり覇権争いを演じてきた舞台となった。このような覇権争い、植民地支配のための正確な地図作成と交易に有用な動植物の収集という国家事業の担い手として登場したのがマゼラン、クック、ブーガンヴィル、ラペルーズなどの航海者達であり、彼らが太平洋海域の正確な地図と詳細な航海記録を残したのであった。エイハブが白鯨を仕留めるために参照する海図や航海記が、大航海時代から連綿と行われてきた国家事業の記録そのものであり、白鯨に復讐するというエイハブの個人的な行為も17・18世紀から本格化する植民地支配のシステムを背景にして始めて成り立ったのであった。

このような支配と交易に有利となる情報収集の中、収集・輸送された新奇な動植物が18・19世紀ヨーロッパの博物学の流行を生みだし、1828年のロンドン動物園や1850年のロンドン博覧会へと収斂していくとともに、太平洋の住人たちの驚嘆すべき習俗が商品として売り出され、更には住民そのものが新奇な商品として陳列されていく。このように商品として売り出された太平洋情報は、ヨーロッパ人が自分たちの視線から観察した結果であった。国家事業の担い手という観察者の視線の先にあるのは、収奪すべき客体としての住民とその習俗であった。見ることと所有することとが不可分であったヨーロッパ人にとって、見られることは逆に自分たちが相手に所有されることでもあったから、観察する自分たちが住民から観察される対象であるとは夢思わなかった。だから、これら国家事業の担い手達の記録は太平洋住民を一方的な視線で語るものが多い。また、この所有と不可分の関係にある視線、視線の先にある客体を分類し陳列していく視線はロマン主義時代の産物でもあり、ロマン主義時代に身を置いたメルヴィルがこの〈見る―見られる〉の関係をどうとらえていったかを初期作品の中に探してみたい。

イスパノ・フォービアと奴隷制  
——「ベニト・セレノ」におけるポストコロニアリズム再考——

松山大学 辻 祥子

「ベニト・セレノ」(“Benito Cereno”)に登場するアメリカ人船長デラノは、難破船の中で繰り広げられる仮面劇にまんまと騙され、忠実な下僕を演じる黒人バボが、実は反乱奴隷のリーダーであり、スペイン人船長ベニト・セレノを影で操っていたことに土壇場になるまで気づかない。従来の批評では、デラノ船長が騙されたのは、彼が黒人は生来劣等であるという当時の偏見の持ち主で、バボの下僕役をそのまま信じてしまったことが原因であるとされていた。しかし原因は他にもある。デラノ船長は一方で、スペイン人ベニト・セレノを執拗に疑い続ける。セレノこそが自分の命を狙い、自分の船を乗っ取ろうとしているのではないかと。デラノ船長の真実を見抜く目は、こうしたスペイン人に対する不信感によって曇らされているともいえるのだ。本発表では、このように設定したメルヴィルのポストコロニアル的な意図について考えてみたい。

まず、「ベニト・セレノ」における難破船の名前が、実在の「トリアル」号から「サン・ドミニック」号に変えられていることに注目し、また頻繁に出てくる僧院や皇帝に関するイメージをつなぎ合わせると、読者は自然と、スペインの新大陸、特にイスパニョーラ島セント・ドミンゴにおける支配の歴史を想起できるようになっている。16世紀初頭、スペインはこの島を西半球初の奴隷輸入地とし、植民地支配を始めるが、それ以降、フランスと領土争いを繰り返す。しかし、現地のスペイン人植民者をもっとも悩ませたのは、そのフランス領から奴隷反乱を起こし、1804年に独立した世界初の黒人国ハイチの存在であった。19世紀半ばまで、隣国ハイチの攻撃を何度となく受けたスペイン側の状況は、当時、奴隷船上や南部でいくつかの奴隷反乱を経験しているアメリカにとって、対岸の火事とはいえぬものであったはずだ。しかし多くのアメリカ人は、スペイン人の恐怖に共感せず、長い植民地支配の末の彼らの苦境を、自国の奴隷制を省みる材料にはしなかった。それはなぜか。その一因として、16世紀から19世紀初頭にかけて、植民地獲得競争の覇者として君臨し続けたスペインに対する、他の列強諸国の反感＝イスパノ・フォービアを、アメリカが共有していたことが考えられる。メルヴィルは、イスパノ・フォービアに妨げられ、こうした植民地支配の真実に目を向けないアメリカ人を、スペイン人船長に対する不信感から彼の苦しみを理解できなかったデラノ像に重ねて、批判しようとしていたのではないか、この仮説を証明していきたい。

## メルヴィル最晩年の詩にみる樂園に触れる

福岡大学 大島由起子

メルヴィルは若き日の船乗り時代に、白人が入り込む寸前のタイピー、支配され墮落させられたタヒチ、現地人を動物のように搾取するハワイを平水夫の視点で見ってしまった。第一作 *Typee* で白人という文明人が “the most ferocious animal on the face of the earth” であると述べたことは有名であるように、彼は自らの太平洋体験と向き合い、ヨーロッパ列強が入り込む前の南海や南北アメリカにおける先住の民に想いを馳せたと考えられる。今回は、そうした思考が生涯続いたことを確認したく、従来は注目されることが少なかった詩集 *John Marr and Other Sailors* や *Timoleon, Etc.* 所収の詩作品を検討する。

“John Marr”（これは散文と韻文の混交作品）の終結部では散文では表せない気分から歌いだすように詩に移行するが、そこに始まる、かつての船乗り仲間語りかける体裁をとった幾編かの詩は、一老人の退行的な過去趣味として片付けられるものではなく、メルヴィル一流の西洋近代への批判が健在である。彼が得たとする救済のあり様も、独特にコスモポリタンの的である。例えば、“To Ned” の詩行には、  
“The Indian Psyche’ s languor won, / And musing, breathed primeval balm/ From Edens ere yet overrun;/ Marvelling mild if mortal twice, / Here and hereafter, touch a Paradise.” とある。煙草を吸って先住民のような気分になれば、この世とあの世とで二度、「樂園」に触れることができるというのだから、宗教的葛藤を抱えて生涯を送ったなどという私（たち）がイメージしがちな作家らしからぬ楽天主である。発表では他に “The Archipelago” や “Herba Santa” も扱う予定。

この発表はハーマン・メルヴィル (Herman Melville) の『ビリー・バッド』 (*Billy Budd*) をアメリカの脱植民地化の物語として読み解くのをねらいとする。ビリーには墮落以前のアダムのイメージが付与され、R.W.B. ルイスの「アメリカのアダム」を連想させるものがある。そのビリーは旧世界の植民主義の象徴ともいえる大英帝国の海軍に強制徴募されるが、海軍法に触れる罪を犯し処刑される。無垢と純粋、そして原初性ゆえに経験やヒエラルキー的秩序、あるいは法の支配する旧世界では生きていけないのである。無垢の権化としてのビリーは新世界アメリカの代表的なヒーローといえる。

大英帝国軍艦『ベリポタント』号の艦長ヴィアは「人類については、形式、慎重な形式がすべてだ。そしてそれがオルフェウスが森の野生の鳥獣・樹木を豎琴で魅了した物語の意味だ」と言う。彼の言う「形式」は海軍の習慣の基準であり、大英帝国の安全と旧世界の救済を保障する目的のための手段である。ギリシャ神話の詩人オルフェウスは豎琴の名手で、無生物まで感動させたといわれる。その言葉の管理能力で野蛮な自然を文明化させるゆえに、植民主義のイデオロギーにしばしば組み入れられている。ヴィアはオルフェウ斯的であり、野蛮な自然人として描かれるビリーは反オルフェウ斯的被征服者といえる。

また、ビリーの物語はスピットヘッドの反乱やノアの反乱といった水夫の反乱やフランス革命を背景として語られる。フランス革命を弾劾したエドモンド・バークに対してトマス・ペインは『人権』と題する書物を出版し反対した。『人権』こそビリーが強制徴募される以前に乗っていた商船の名前である。そしてトマス・ペインは『コモン・センス』においてアメリカの独立を擁護した人物でもある。『ビリー・バッド』は、トランスナショナルに相互照射しながら、アメリカの脱植民地化を物語るのである。

メルヴィルは「ホーソンと彼の『苔』」 (“Hawthorne and *His Mosses*”) においてナサニエル・ホーソン (Nathaniel Hawthorne) をアメリカのシェークスピア (Shakespeare) と褒め称えアメリカ文学のイギリス文学からの独立を宣言した作家でもある。『ビリー・バッド』もまたイギリスの伝統的なキャノンともいべき文学から独立し、国際的な新しい文化の舞台に登場したアメリカ的作品である。

文学面、政治面、そしてイデオロギーの面において『ビリー・バッド』が脱植民地化のテキストであることをさらに論じてみたい。

# 中・四国アメリカ文学会

## 平成 18 年度活動報告

(平成 18 年 4 月～平成 19 年 3 月)

【平成 18 年】(2006 年)

『中・四国アメリカ文学研究』第 42 号発行(6 月 1 日)

『中・四国アメリカ文学会会報』第 45 号発行(6 月 1 日)

### 中・四国アメリカ文学会第 35 回大会

日時：平成 18 年 6 月 10 日(土)、11 日(日)

場所：愛媛大学総合情報メディアセンター1 階メディアホール  
〒790-8577 松山市文京町 3 番 (tel. 089-927-9211)

#### 第 1 日 6 月 10 日(土)

中・四国アメリカ文学会 平成 18 年度役員会 (11:00～12:20)

開会式 (13:20～13:30) 開会の辞 会長 田中 久男

研究発表 (13:45～16:40)

1. Horatio Alger, Jr. の *Tattered Tom* における浮浪少女  
(13:45～14:25) 司会 稲田 勝彦 (比治山大学)  
発表 本岡 亜沙子 (広島大学[院])
2. Keats と Faulkner——異教的世界と *Cold Pastoral* について  
(14:25～15:05) 司会 藤本 幸伸 (広島文教女子大学)  
発表 川口 千富美 (福岡大学[非])  
(休憩 15 分)
3. Toni Morrison の芸術とポリティックス  
——*Beloved* とオペラ *Margaret Garner*  
(15:20～16:00) 司会 吉岡 志津世 (神戸女子大学)  
発表 森 あおい (広島女学院大学)
4. “Hawthorne and His Mosses” における “blackness” の二重性について  
(16:00～16:40) 司会 西前 孝 (岡山大学)  
発表 藤吉 清次郎 (活水女子大学)

特別講演 (17:00～18:00)

講師 折島 正司 氏 (青山学院大学)

演題 アメリカン・ゴシックと「不気味なもの」  
司会 林 康次 (愛媛大学)

懇親会 (18:30~20:30)

会場 伊予鉄会館 クリスタルホール 5階  
〒730-0011 広島市中区基町 6-36 (tel. 082-222-8501)  
司会 小野 紳一郎 (松山東雲女子大学)  
会費 6,000 円

第2日 6月11日(日)

シンポジウム (9:30~12:30)

極西部時代と Mark Twain

司会 市川 博彬(島根大学名誉教授)

1. ダブル・クロス・ゲーム——1860年から1869年の Samuel L. Clemens  
発題 辻 和彦 (福井大学)
2. *Roughing It* 試論——笑いの変質と exile の想像力  
発題 水野 敦子 (山陽女子短期大学)
3. Mark Twain の初期作品について——ジャーナリストから作家へ  
発題 大宮 健史
4. 金と権威と書くことと——初期作品における書くことの重要性  
発題 和栗 了 (京都光華女子大学)
5. サムからマークへ——作家マーク・トウェインの誕生  
発題 市川 博彬

総会 (12:30~12:50) 議長 会長 田中 久男

閉会式 (12:50~13:00) 閉会の辞 副会長 林 康次

「News Letter」第73号発行 (2006年7月31日)

秋季研究会

日時： 9月9日(土曜日) 14:40~17:00

場所： 県立広島大学広島キャンパス 教育研究棟 1、1212 室

734 - 8558 広島市南区宇品東1丁目1番71号 (電話：082-251-5178)

中・四国アメリカ文学会支部運営委員会並びに全国大会実行委員会 (1) 13:00~14:40

[研究発表]

1. 発表：中島 美智子 (米子工業高専) 14:40~15:20

題目：John Steinbeck のユートピア  
——*The Pastures of Heaven* と *The Grapes of Wrath* を中心に——

司会：山内 圭（新見公立短大）

2. 発表：山辺 省太（広島経済大）15:30～16:10

題目：アポカリプスと海——Nathanael West の *Miss Lonelyhearts* における  
欲望と復讐の詩学——

司会：前田 一平（鳴門教育大）

3. 発表：大地 真介（広島経済大）16:20～17:00

題目："That Evening Sun"を読み直す

司会：早瀬 博範（佐賀大）

「News Letter」第74号発行（2006年11月1日）

### 冬季研究会

日時：12月2日（土曜日）14:40～17:00

場所：広島文教女子大学 6号館4階641教室  
広島市安佐北区可部東1-2-1（電話：082-814-3191）

中・四国アメリカ文学会支部運営委員会並びに全国大会実行委員会（2）13:30～14:30

### [研究発表]

1. 発表：西藤 光代（広島大 [院]）14:40～15:20

題目：*In Dubious Battle* から *The Grapes of Wrath* への航跡  
——Monologue から Polyphony へ——

司会：有木 恭子（就実大）

2. 発表：真野 剛（広島大 [院]）15:30～16:10

題目：ジョン・ミューアの希求した聖地  
——エコトピア構想としてのシエラ・ネヴァダ——

司会：伊藤 詔子（松山大）

3. 発表：辻 祥子（松山大）16:20～17:00

題目：トランス・アトランティック・ダグラス  
——「ヒロイック・スレイヴ」に見られる再生の証——

司会：前川 裕治（広島女学院大）

\*忘年会 18:30～20:30

和さび光町店 広島市東区光町1-9-29 第4寺岡ビル1階(TEL: 082-567-8885)

【平成 19 年】(2007 年)

「News Letter」第 75 号発行 (2006 年 2 月 1 日)

支部編集委員会 (論文審査他)

日時： 2007 年 2 月 28 日 (水) 13:00~18:00

場所： 愛媛大学法文学部

出席者：加藤好文、松島欣也、横田由理

#### 春季研究会

日時： 3 月 10 日 (土曜日) 14:40~17:00

場所： 広島経済大学 図書館 4 階大会議室

広島市安佐南区祇園 5-37-1 (電話 082-871-1000)

中・四国アメリカ文学会支部運営委員会並びに全国大会実行委員会 (3) 13:00~14:30

#### [研究発表]

1. 発表：本田 良平 (広島大 [院] ) 14:40~15:20

題目： *Light in August* における人間の存在の特別さと卑小さ

司会：大地 真介 (広島経済大)

2. 発表：塩田 弘 (福岡大) 15:30~16:10

題目：ポストモダンの自我像をめぐって

——アーネスト・カレンバック『エコトピア』を読む——

司会：横田 由理 (広島国際学院大)

3. 発表：毛利 律子 (吉備国際大 [非] ) 16:20~17:00

題目：Concord Authors and Cause of Their Death: Tuberculosis (An Explosion of Tuberculosis in 19th-Century East America and Death of Emerson and Thoreau)

司会：松島 欣也 (香川大)

## 中・四国アメリカ文学会 2006(平成 18)年度会計報告

(平成 18 年 4 月 1 日～平成 19 年 3 月 31 日)

会計幹事      大地真介

会計監事      上田 みどり  
                 今石 正人

(単位:円)

〔収入の部〕		〔支出の部〕	
項 目	金 額	項 目	金 額
前年度繰越金	2,656,544	会誌 No.42 印刷費	396,626
会誌 No.42 執筆者負担金(3名分)	60,000	会報 No.45 製作費 (プログラム含む)	53,865
支部機関誌発行補助費	150,000	支部大会費(懇親会費含む)	544,435
懇親会費	342,000	本部会費[本部に振込]	504,000
本部会費	504,000	通信費	153,425
支部会費	665,000	謝礼金(校閲・筆耕料等含む)	20,000
展示料(7社分)	35,000	人件費(アルバイト含む)	54,000
通帳利子	10	会議費(編集関係含む)	28,890
		消耗品費(コピー代含む)	382
		雑費	70,321
		振込手数料	17,065
合 計	4,412,554	合 計	1,843,009
平成 18 年度 総収入			4,412,554
平成 18 年度 総支出			1,843,009
平成 18 年度 残 金			2,569,545
平成 18 年度残金内訳 通帳残			520,065
同 振替残			2,049,480
平成 19 年度への繰越金(残金合計)			2,569,545

### 〔本部会費内訳〕

(単位:名) (単位:円)

年 度	合計人数〔振替〕	合計金額
2004 (平 16)	2	8,000
2005 (平 17)	9	36,000
2006 (平 18)	113	452,000
2007 (平 19)	2	8,000
合 計	126	504,000

### 〔支部会費内訳〕

(単位:名) (単位:円)

年 度	人 数		合計金額
	一般	学生	
2004 (平 16)	2	0	8,000
2005 (平 17)	11	0	44,000
2006 (平 18)	135	22	606,000
2007 (平 19)	1	1	7,000
合 計	149	23	665,000

## 中・四国アメリカ文学会会則

(名称)

第1条 本会は、中・四国アメリカ文学会(The Chu-Shikoku American Literature Society)と称し、事務局を事務局幹事長の所属機関に置く。

(目的)

第2条 本会はアメリカ文学の研究を行い、その成果の発表をつうじ研究水準の向上をはかり、あわせて内外学会との交流をはかることを目的とする。

(性格)

第3条 本会は日本アメリカ文学会に加盟し、その中・四国支部となる。

(会員の資格)

第4条 第2条の主旨に賛同する者は会員1名の推薦により会員になることができる。

(事業)

第5条 本会は第2条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 大会および研究会の開催
2. 会誌および会報の発行
3. その他必要と認められる事業

(会費)

第6条 本会の会費は年額4,000円とする。ただし、学生会員は年額3,000円とする。

(役員)

第7条 本会に次の役員を置く。

会 長 (兼支部長)	1 名
副会長	1 名
評議員	若干名
幹事長	1 名
幹 事	若干名
支部運営委員	若干名
会 計	1 名
監 事	2 名
支部編集委員	若干名
本部代議員	3 名
本部大会運営委員	1 名

1. 会長は本会を代表し、会務を総轄する。会長の選出は評議員の互選による。
2. 副会長は会長を補佐する。副会長の選出は評議員の互選による。
3. 評議員会は本会に関する重要事項を審議し決定する。評議員は総会において選出する。評議員会は必要に応じて他の役員を加えることができる。
4. 幹事長は会長の統轄のもとに幹事、そのほかの役員と協力して本会の会務を執行する。幹事長、幹事は評議員会の承認を経て会長が委嘱する。
5. 支部運営委員は、大会、研究会等支部の運営を補佐する。支部運営委員は評議員会の承認を経て会長が委嘱する。支部運営委員会は、会長、副会長、幹事長、幹事、会計、支部運営委員で構成する。
6. 会計は本会の財政を執行し、監事はその執行状況を監査する。会計ならびに監事は評議員会の承認を経て会長が委嘱する。
7. 支部編集委員は機関誌の編集を行う。支部編集委員は評議員会の承認を経て会長が委嘱する。
8. 代議員、本部大会運営委員、本部編集委員は評議員会の承認を経て会長が委嘱する。

(役員任期)

第8条 役員任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、会長、代議員、本部大会運営委員、本部編集委員の任期は2期4年を限度とする。なお、本会の会長または副会長の任にある代議員は、重任することができる。

(顧問)

第9条 本会は顧問を置くことができる。顧問は評議員会の承認を経て会長が委嘱する。顧問は重要事項に関して評議員の諮問に答える。

(総会)

第10条 本会は原則として毎年1回総会を開く。

付 則

- この会則は、昭和53年4月1日から施行する。
- この改正会則は、昭和60年7月1日から施行する。
- この改正会則は、昭和62年6月28日から施行する。
- この改正会則は、昭和63年6月26日から施行する。
- この改正会則は、平成4年6月21日から施行する。
- この改正会則は、平成7年6月25日から施行する。
- この改正会則は、平成9年6月23日から施行する。
- この改正会則は、平成15年6月15日から施行する。

## 編集後記

- \* 『会報 No.46』をお届けします。「中・四国アメリカ文学会第36回大会」にご持参下さい。
- \* 新入会員は以下の通りです。(順不同、敬称略)  
平尾 奈緒子、南 有規子、伊達 美和子。
- \* 退会者は以下の通りです。(順不同、敬称略)  
森田 勝治、並木 節子、篠原 信子、田中 栄子。  
(ただし、上記退会者以外にも、会費の3年間未納などの事情により、会員名簿から削除されている場合があります。)
- \* 平成19年度支部大会及び全国大会で発表される会員のみなさまのご健闘をお祈りいたします。また、司会の先生方には大変お世話になりますが、どうぞよろしくお祈りいたします。なお、本年の日本アメリカ文学会全国大会は中・四国地区が担当します。会場は広島経済大学で、10月13~14日に開催されます。開催校の会員の方々を始め実行委員の方々には、お忙しいとは存じますが、よろしくご支援のほどお願いいたします。
- \* 支部総会では本部会費値上げについてご協議いただきますように、学会を取り巻く状況には厳しいものがあり、また会員のみなさまも教育研究以外の公務に忙殺される日々をお過ごしのことと存じますが、学会活動は会員おひとりお一人のご支援・ご協力によって成り立っております。各研究会等での積極的なご発表・ご出席を賜り学会を盛り上げてくださいますよう、よろしくお祈りいたします。また会費につきましても遅滞なくお納めくださいますよう、お願いいたします。
- \* 中・四国アメリカ文学会の会員数は、平成19年4月現在で189名です。みなさまのお近くで入会希望の方がいらっしゃいましたら、事務局までご連絡ください。また、会員名簿に脱落、誤記あるいは新たに住所変更等ございましたら、併せてご一報ください。
- \* 事務局を担当して一年になりますが、この間、引き継いだばかりで何かと行き届かないことも多い中、不慣れな事務局を暖かくご支援くださり、ありがとうございました。

幹事長 吉岡 志津世

中・四国アメリカ文学会会報 No. 46

The Chu-Shikoku American Literature Society  
Bulletin No. 46

---

2007年6月1日発行

発行者 中・四国アメリカ文学会  
代表者 会長 林 康次  
事務局 岡山大学大学院社会文化科学研究科 西前研究室  
〒700-8530 岡山市津島中 3-1-1  
Tel.& Fax 086-251-7437  
e-mail yoshioka@suma.kobe-wu.ac.jp  
URL: <http://www.chushi-als.org>

振替 01380-0-22492

作製 中・四国アメリカ文学会事務局

印刷 (株)三門印刷所

〒703-8233 岡山市高屋 116-7 Tel. 086-273-0550 Fax. 086-273-0587

---